

韓国における中村與資平の建築¹⁾

Architecture designed by Nakamura Yoshihei in South Korea

キーワード：

中村與資平
中村工務所
近代建築
朝鮮銀行
天道教
徳寿宮

抄録

中村與資平は浜松市に生まれ、静岡県内の近代の公共建築を多く設計した建築家である。彼は東京大学で学んだ後、朝鮮半島に渡り、最初の民間の建築事務所をつくった。そこでは朝鮮銀行関連の建築をはじめとして、当時最先端のデザインを取り入れた建築物を手がけた。朝鮮銀行群山支店、天道教中央大教堂、国立現代美術館徳寿宮等は韓国の文化財として保全されている。

はじめに

中村與資平は1880（明治13）年、静岡県長上郡天王新田村（現浜松市東区天王町）に生まれ、1905（明治38）年、東京帝国大学建築学科を卒業し、建築家として活躍した（図1）。中村與資平は朝鮮半島に渡り、最初の民間の建築事務所をつくった人物であった。日本に帰国後は東京に中村工務所を構え、鉄筋コンクリートの小学校、銀行、公共建築などを設計した。特に静岡県内に本格的な鉄筋コンクリート造の建築物を多くつくったことは重要で、県庁舎、市庁舎、公会堂、県内銀行の本店などを次々と手がけ、静岡県内の近代の公共建築のイメージは中村與資平によってつくられたと言ってもよい。

中村與資平のデザインは基本的に西洋の様式建築に属するもので、モダニズムが始まる前の、日本で近代化といえば西洋化を意味していた時代のものである。そこでは、新しい様式をつくりだすことはないが、西洋のさまざまな時代の様式を取り入れ、非常に多様な表現を見せている。強い主張や革新的な斬新さはないが、極端をきらい、節度を保った親しみやすさがあり、いわば中庸の感覚とでも呼べるような安心感がある。このことは、おそらく中村與資平の人柄でもあり、また、彼の生きた時代と場所と仕事によって要請された態度でもあったと考えられる。以下、韓国における仕事を中心に、中村與資平の作品と建築家としての特徴を取り上げてみたい。

1. ソウルでの独立

中村與資平が東京帝国大学建築学科を卒業したのは、日本で近代的な建築教育が始まって25年ほど経過した頃で、彼らはいわば二代目の世代と言える。彼は卒業後、大学での恩師であった辰野金吾の事務所で働きはじめたが、辰野は日本ではじめて建築教育を受



図1 中村與資平（中村工務所『営業経歴』より）



図2 ソウル、韓国銀行 南大門路のランドマーク



図3 ソウル、韓国銀行 貨幣金融博物館



図4 群山、近代建築館 屋根の窓が特徴的

¹⁾ 本稿は2019年9月に韓国で予定されていた講演の梗概に、注釈を加えたものである。この企画には常葉大学造形学部のキム・ミンジ講師の尽力があったが、諸般の事情により中止となった。

けたひとりであり、中村より26歳年上であった。辰野の代表作は日本銀行本店や東京駅であるが、このことが示すように、一代目の仕事は、近代国家の中央の顔をつくることだった。これに対して、次の中村與資平らの世代は、地方の近代化を進める役割を担い、中村の場合は、朝鮮・満州が最初の活躍の舞台となった。

中村與資平は辰野葛西事務所で第一銀行韓国総支店（工事途中で朝鮮銀行本店と改称）の設計を担当した。後に大韓民国の韓国銀行本店となり、現在は韓国銀行貨幣金融博物館となっている建物である（図2、図3）。彼は1908（明治41）年、工事監理のためにソウルを訪れたが、このときの身分は建築事務所所員としてではなく、施主である銀行からの辞令であった²⁾。これには理由がある。当時、銀行側でこの建築を担当していたのは竹山純平であり、竹山は中村の義理の兄（妻同士が姉妹）であった。ここから推測すると、中村は辰野葛西事務所に入った時点でこの建築を担当することになっており、韓国に渡ることは必然であったのかもしれない。この工事の成功によって彼は独立し、1912（明治45）年、ソウルに中村建築事務所を開設した。朝鮮半島における最初の民間の建築事務所であった。

1917（大正6）年には大連にも出張所と工事部を開設し、朝鮮銀行大連支店（1920）、横浜正金銀行長春支店（1922）など、満州にも作品を残した。

2. 群山での先端デザイン

朝鮮半島では銀行関係の仕事を中心に数多くの建築を手がけ、銀行建築の定番である古代ギリシア・ローマに由来する古典主義的な作風に加え、1919（大正8）年にオーストリア人アントン・フェラーを所員として雇ったことから、ドイツやオーストリアで流行していた、ユーゲントシュティールやゼセッションの作品も残した。フェラーはチューリッヒで学び、第一次世界大戦に従軍したが、ロシアの捕虜になりシベリアを脱出してソウルにやってきた。

朝鮮銀行群山支店（1922）は、現在、群山近代建築館として公開されている（図4、図5）。入口や、その上部の屋根の窓などにゼセッション特有のデザインが見られる。内部は大きな吹抜をもつ典型的な銀行のプランであり、細部の装飾が独特である。これらのデザインは当時としては日本国内にもほとんどない先端的なものであった。日本占領時代の痛ましい歴史を伝える建物でもあるが、建築的には丁寧に修復され、大切に活用されている。

²⁾「第一銀行臨時建築部工務長 工學士 中村與資平」とある1909（明治42）年の名刺が、浜松市立中央図書館に所蔵されている。同館の鈴木正之氏からご教示を受けた（2020年10月）。



図5 群山、近代建築館 2層吹抜の大空間



図6 群山、李永春記念館 洋韓日の様式が共存



図7 ソウル、天道教中央大教堂 仁寺洞から見える塔



図8 ソウル、天道教中央大教堂 ゼセッションの正面

群山は米の輸出港として繁栄し、今も植民地時代の建物が残るが、郊外には熊本利平の住宅が現存している（図6）。群山の熊本農場内にあった自邸は、後に医師であった李永春が譲り受け、現在は看護学校の敷地内で記念館となっている。この住宅が中村與資平の設計と見られる³⁾。屋根は天然スレートの乱張りで、日本では見られないものである。基礎の丸石積み、ログハウスの意匠など、山荘風の雰囲気がある。内部は洋間、オンドル房、和室と、洋韓日の様式が連続しており、この場所、この時代にしかない構成となっている。

3. 天道教中央大教堂

中村與資平の朝鮮半島時代の仕事でよく知られているのは、ソウルの天道教中央大教堂（1918 - 1921）である（図7、図8、図9）。総面積約2000㎡、教堂部分は約1000㎡の無柱大空間があり、中村の営業経歴には煉瓦造と記されているが、大空間には鉄骨造もしくは鉄筋コンクリート造が併用されていると考えられる。正面入口上部には塔があり、その奥に教堂、最奥に演台という構成である。塔のデザインはフェラーが担当したと思われ、ゼセッションのデザインが見られる。仁寺洞の飲食店街から見える塔は、印象的な景観である。

周知の通り、天道教は1919（大正8）年3月1日の独立運動を主導した団体であり、ちょうどその渦中にあった時期に、大教堂の設計、建設も進められていた。中村與資平に設計が依頼された経緯は不明だが、次のような理由が推測される。第一に、無柱大空間をもつ大規模な建築物を設計できる技術があったこと、第二に、民間の事務所で日本政府と直接関係がなかったこと、逆に言えば、当時の朝鮮半島で日本政府の官庁営繕以外にこうした大規模建築物を設計できる事務所はほとんどなかったと思われる。大教堂に隣接して別棟があったが、1960年代に道路拡張と新館建築のため、1棟がソウル北部の牛耳洞に移築された（図10）。牛耳洞は天道教の聖地であり、道場の鳳凰閣や孫秉熙の墓もある。

4. ソウルから東京へ

独立運動以後、日本の設計事務所と天道教との関係は政治的に微妙な立場となったはずだが、大教堂建設中の1920（大正9）年12月に、中村與資平のソウルの事務所は失火によって焼失してしまう。このため、

³⁾ ソウル漢陽大学で長く教鞭を執った富井正憲による。他方、熊本利平の小田原や壱岐における住宅を設計した森山松之助による等の説もあり、定かではない。



図9 ソウル、天道教中央大教堂 無柱大空間の教堂



図10 ソウル、牛耳洞の天道教施設 大教堂の場所から移築された



図11 東京、大塚窪町小学校（現存せず）



図12 浜松、静岡銀行浜松営業部

これ以前の図面や書類はほとんど残されていない。焼失を機に、中村は事務所を後進に譲ることに決め、自らはフェラーを伴い、1年にわたる米欧の視察に向かった。フェラーは米国の事務所に移籍した⁴⁾。

中村は日本に帰国後の1922（大正11）年、東京に中村工務所を開設し、仕事を日本国内に移すことになった。東京では小学校の鉄筋コンクリート化が始まっていたが、その翌年、関東大震災が起き、図らずも鉄筋コンクリート造の耐火・耐震性能が広く知られることになった。中村工務所は、本格的な鉄筋コンクリート造を設計・監理・施工できる数少ない会社として地位を確立した（図11）。

5. 静岡の公共建築

中村與資平は故郷の静岡県浜松市を中心に、地域の近代化を象徴する建築物を多く手がけた。遠州銀行本店（1928、現静岡銀行浜松営業部）（図12）、浜松銀行集会所（1930、現旧浜松銀行協会＝木下恵介記念館）（図13）、三十五銀行本店（1931、現静岡銀行本店）（図14）、豊橋市公会堂（1931）、静岡市庁舎（1934）（図15）、静岡県庁舎（1937）などがそれで、いずれも現存する。これらの建築物は都市の重要な場所に位置している。このことは、彼の作品を多くの人が目にしたということであり、その建物が街の姿として人々の記憶に刻み込まれていることを意味する。これらの作品の建築資料コレクション（設計図面、仕様書、写真等）は浜松市立中央図書館に所蔵されている。

6. 国立現代美術館徳寿宮館での展覧会

ソウル、徳寿宮の中に国立現代美術館徳寿宮館がある（図16）。これは李王家美術館として、韓国で初めて美術館用途に建てられた建築物で、1938（昭和13）年に中村工務所が設計、監理を手がけた。主担当は当時在籍していた小野武雄と見られる。

この美術館が2018（平成30）年に80周年を迎え、特別展が開かれた。このとき、浜松市立中央図書館の資料も出品され、建築そのものが展示品とされた。この美術展の構成は、韓国の人々が、この建築物を遺産と位置づけている証拠であり、静岡県の大学に勤務し、浜松市に住む者として、たいへんうれしく感じた。前述した朝鮮銀行群山支店や天道教中央大教堂も文化財として保全されている。これらは日本の植民地時代に建設されたものではあるが、建築物としての価値を客観的に評価し、活用している韓国の人々に心からの敬

⁴⁾ ニューベリー図書館（シカゴ）のアーカイブによると、1927年の記事として、シカゴ美術館附属美術大学教授とある。



図13 浜松、旧浜松銀行協会＝木下恵介記念館



図14 静岡、静岡銀行本店



図15 静岡、静岡市庁舎



図16 ソウル、国立現代美術館徳寿宮館

意を表したいと思う。中村與資平の建築物の保全・活用を通じて、韓国と日本の、単純ではない、しかし着実な、相互理解が深まることを願う。

参考文献：

藤岡洋保「静岡市庁舎と静岡市公会堂の立面に示された対照的な設計態度：昭和初期の合理主義建築理論の適用に関する一考察」『日本建築学会論文報告集』No.331, pp.139-146, 1983

中村與資平展実行委員会『ドームをめぐる蒼い風』1989

西澤泰彦「建築家中村與資平の経歴と建築活動について」『日本建築学会計画系論文報告集』No.450, pp. 151-160, 1993

西澤泰彦『海を渡った日本人建築家』彰国社, 1996

西澤泰彦『日本植民地建築論』名古屋大学出版会, 2008

西澤泰彦「続・生き続ける建築—9 中村與資平」『INAX REPORT』No.187, pp.4-14, 2011

富井正憲「隣国からの建築便り」『建築士』2016.8

浜松市立中央図書館 中村與資平コレクション

[https://trc-adeac.trc.co.jp/Html/Home/](https://trc-adeac.trc.co.jp/Html/Home/2213005100/topg/22nakamura.html)

[2213005100/topg/22nakamura.html](https://trc-adeac.trc.co.jp/Html/Home/2213005100/topg/22nakamura.html)

(なお、同解説「中村與資平の建築」(土屋和男)の一部を本稿に転載している)

中村與資平記念館新館

<https://ameblo.jp/yosihei8/> (2020.11.7 閲覧)

ニューベリー図書館 (シカゴ) アーカイブ

https://flps.newberry.org/article/5422061_2_0676 (2020.11.7 閲覧)

植民地時代の韓国

<https://colonialkorea.com/2016/01/28/gunsan/> (2020.11.7 閲覧)

